甲子温泉 2025

2025 年 2 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

2 月の雪の多い時季、福島県の秘湯に泊まってきた。普通に行くのではつまらないので、JR のローカル線を駆使して遠回りのルートをとることにしたが、そうは問屋が卸さなかった。

■水郡線

モロッコ旅行で知り合った旅友 A から福島県の秘湯「甲子温泉」にひいきの宿があるので一緒に行こうと誘われた。彼はテレビの情報番組に出てくるコメンテータ風の紳士で、その彼は 3 泊するというが、残念ながら私は別件があって 1 泊だけ付き合うことにした。

新幹線で行っても面白くないので、私にとっては初乗車の水郡線（すいぐんせん）で行くことにした。もちろんコメンテータを誘ったが、「そんな体力がないよ」とさりげなく断られた。

水郡線とは名前こそ勇ましいが、水戸と郡山を結ぶから“水郡”で、JR のローカル鉄道だ。

私は水戸で水郡線の各駅停車に乗り込む。3 両編成で発車したが、車内アナウンスでは郡山に着くのは先頭の 1 両だけというから、これから人里離れた秘境を走り抜けていくのかと思うと、何故か私の心はワクワクしている。

【水郡線の線路と周辺風景】

案の定、車窓からの景色は水戸周辺だけは少し賑やかだったが、やがてのどかな田園風景へと変わる。ただ田園風景というと聞こえがいいが、どこにでもある殺風景な田舎の風景で、小高い丘と畑が主体で、時々人家もあれば小さな古い工場などもある。どこにでもある退屈な風景で、秘境でもなければ、日本の里山の原風景といったものでもない。

日本の鉄道は童謡でも「今は山中、今は浜、今は鉄橋渡るぞと、思う間もなくトンネルの闇を通って広野原」と歌われている。つまり日本の国土は山の海も川も野原もあってバラエティに富んでおり、そこを鉄橋やトンネルを駆使して走るのが、日本の鉄道だと言っている。

しかし水郡線沿線には海はもちろん、大きな川や高い山などひとつもない。ある意味、日本においては貴重な鉄道かもしれない。

まあ、読書や考え事をするにはもってこいのローカル線かもしれない。

こんな殺風景で退屈な景色が３時間も続く。このような状況をコメンテータはきっと知っていたのだろう。

■甲子温泉「大黒屋」

新白河駅でコメンテータと待ち合わせして、宿の送迎バスに乗って甲子温泉「大黒屋」に到着する。この宿は日本秘湯を守る会の宿なので、入口ではあの大きな提灯が出迎えてくれる。

ロビーのソファに座っていると、宿の美人若女将が「A 様、いらっしゃいませ、ここにサインお願いします」と宿泊名簿を持ってくる。常連なのでサインだけでいいらしい。

少し鼻の下を伸ばしながら美人若女将と楽しそうに会話しているコメンテータを見ていると、雲の上の人に見えてくるから不思議なものだ。

大黒屋は甲子温泉の一軒宿で、大きな岩風呂が有名な宿だ。開湯して 400 年近いが、現在の建物は和風モダンの造りで新しくて気持ち良い。

【大黒屋の入口・外観】

【大黒屋のフロント・ロビー】

■大岩風呂

本館から少し離れた場所に源泉の湧出口があり、その隣に大岩風呂の木製の大きな湯殿がある。

入口には“混浴”の札がかかっており、わずかな期待感を持って戸を開けて中に入る。残念ながらというか案の定というか、おじさんが 1 人だけ入浴している。私は多少落胆したが、私よりもむしろコメンテータの方が肩を落としているように見える。

そして湯に浸かる。湯船は 5m×15m もあって、深さも 1.2m ある。太い木で組んだ木造の湯殿の雰囲気がまた良い。天井が高く、コメンテータは「この天井の高さがいいよね」と言って、まったりしている。

【大岩風呂　（誰もいない時に撮影）】

私は湯船の深さが気になる。湯の中に子宝石と呼ばれる大きな石があって、そこに座るとちょうど良い高さになる。しかしながらこの石に座ると子宝に恵まれると書かれている。

いまさら私に子宝と言われても困ってしまうが、１カ月前に孫が生まれたので、ご利益はあったのかもしれない。

それにしてもこの湯に浸かっていると、何故か“まったり”として癒される。そのまったり感はどうしてだろうか。私の温泉ソムリエの血が騒ぎだす。

温泉成分表には低張性・弱アルカリ性・単純泉と書かれており、これを見る限り単に熱い湯が出ているだけだが、源泉の湧出温度が 44.7℃と絶妙だ。そのため加温も加水もせずに、かけ流しただけで入浴温度は適温の 41～42℃になる。

温泉は地中にある時は空気（酸素）に触れていないので酸素が足りない状態で存在する。つまり酸化の反対の還元側にあり、最も鮮度が高い状態にある。それが地上に出ると空気に触れて酸化していく。その酸化を助長するのが加温や加水、循環、あるいは源泉からの距離が長いことでたくさんの空気に触れて鮮度が落ちる。

一方で人間の体の老化についても、ある意味では酸化によるものだ。

これが還元系の温泉つまり鮮度の高い湯に浸かると酸化を抑止し、還元系に移行しようとする。つまり若返り、アンチエイジング効果を生む。

ここの大岩風呂は源泉湧出口の近くにある。そして絶妙な温度なので加温も加水も、もちろん循環もしていないから鮮度が高い。つまり若返り効果があり、それがまったり感の理由だろう。

■食事

夕食はとにかく豪華だ。

福島名産の“馬刺し”をはじめ、“福島牛”、そして“山女魚”、“岩魚”、“鮎”も登場する。各々の調理方法は異なるが、この 3 種の川魚の揃い踏みは実に珍しい。私の経験では初めてかもしれない。

そして海の幸の“めひかり”、“ホタテ”、“海老”も出てくる。福島県の海で獲れたということで昨今の冷凍技術と輸送技術によって可能になったようだが、ここは山の中で海の幸はしっくりこない。それでも美味いから、まあいいか。

【夕食の各種料理】

■朝食

朝食はトレーで 1 人前ずつ出てくる。宿泊者が多いならば、いわゆるバイキング方式が宿にとってメリットが大きいが、この宿は小ぢんまりとしているのでそのメリットが得られないのだろう。あるいは個別提供が宿のポリシーなのかもしれない。

私にとっては取りすぎ食べ過ぎにならないから個別提供の方がありがたい。

内容は定番の納豆、玉子焼きに加えて自家製の豆腐などもあって、馴染みのあるものが並び安心感がある。

【朝食】

■雪の壁見のコーヒー

朝食の後のひと時、雪見のコーヒーを楽しむ場所がロビーの一角にあり、美味しいコーヒーを振る舞ってくれる。しかし残念ながら数日前からの大雪で、それは“雪の壁見のコーヒー”に化している。

何の変哲もない雪の壁を見ていて、私はあの水郡線の退屈な車窓を思い出す。奇しくもコメンテータはこれを 3 日間見続けることになるのか。

【雪の壁見のコーヒー】

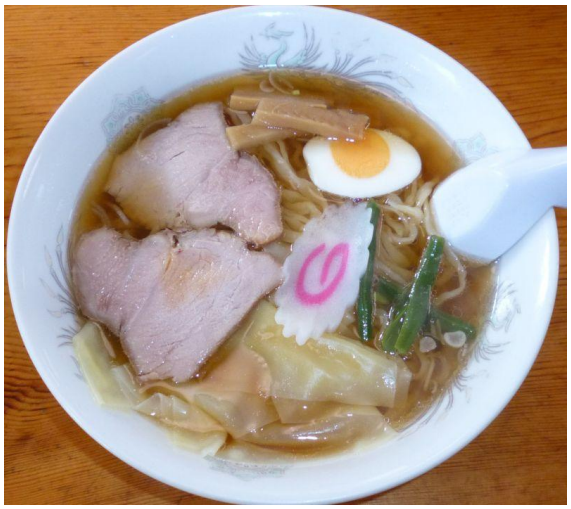
■只見線は運休

翌日は郡山から会津若松に出て、水郡線よりもはるかに超ローカル線の只見線に乗って帰る予定を組んでいた。雪の壁見のコーヒーが物語るように大雪のために只見線は運休しており、再開の目途が立っていない。仕方なく新白河から新幹線で帰ることになる。

白河と言えば白河ラーメンが有名で、市内にはラーメン店が 100 店舗以上ある。白河ラーメンは醤油ベースのスープと太目のちぢれ麺が特徴で、同じ福島県の喜多方ラーメンによく似ている。

白河ラーメンの有名店は「とら食堂」だが、かなり遠いので、ちょっと根性が出ない。今回は駅から近いラーメン店に入る。

私の友人が「白河ラーメンならばワンタンメンだよ」と言っていたことを思い出し、ワンタンメンを注文する。やはり喜多方ラーメンのようで、懐かしい味に感じた。



【白河ラーメンのワンタンメン】

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。ただし今回は私の独断で評価した。

評価項目は泉質、風呂、料理、コスパ、サービス、建物・部屋、立地環境の 7 項目で、平均値を総合点としている。温泉は泉質と風呂で分けており、立地環境はかつて秘湯度という項目だったが、都市型の温泉もあるのでロケーションや景色を総じて評価するようにした。

評価基準は 5 段階としてその定義は、5 は驚き感動、4 は普通に良い、3 は可もなく不可もない、2 は普通に悪い、そして 1 は失望落胆としている。

甲子温泉「大黒屋」は、泉質 5、風呂 5、料理 4、コスパ 4、サービス 4、建物・部屋 4、立地環境 4、総合点 4.29 になった。

湧出温度は 44.7℃、pH 7.6、泉質は低張性・弱アルカリ性・単純泉だった。

■旅の記録

実施は 2025 年 2 月 16 日（日）～2 月 17 日（月）の 1 泊 2 日で、その行程を示す。

・1 日目　6 時に自宅を出発し、品川発ひたち 3 号乗車、水戸で JR 水郡線に乗車して 190 分、
郡山から東北本線で新白河へ、車内で昼食、
新白河から旅館の送迎バスに乗って 14 時 30 分、宿にチェックイン

・2 日目　10 時宿の送迎バスで出発、新白河の「いげたやラーメン」で昼食、
新幹線で東京に戻り帰宅

費用は約 31770 円で内訳は以下のとおりになる。

・大黒屋宿泊費　18770 円（10%のリピータ値引き、生ビール 1 杯含む）
・昼食など　2000 円（昼食 2 食分とビールなど）
・交通費　11000 円（往復は水戸、郡山経由、復路は新白河から東京経由）